

広報  
市民リポーター  
だより  
④

# ゆとりある

# 子育てを

## 地域ぐるみで

「万全といえます」という言葉は、私たちが生活基盤を築くうえで、基本のような気がして、深くうなずいてしまいました。

「はえば立て、立てば歩めの親心」というのは、どの親にも共通していることと思いますが、ふと、これまでの育て方で良かったのかと考えさせられることがあります。

そこで今回は、市教育委員会社会教育指導員の三浦さんから子育て、非行問題等さまざまな角度からお話を伺いました。

## 親は子の鏡

だれもがこれまでの自分の生き方や考え方を基準とした「もとの差し」を持って暮らしているわけですが、子供たちは子供たちなりに自分のもの差しを作り始めています。親は子の鏡、子供の発言、行動に親まねを見るとハッとします。もし親が、自分のもの差しのひずみや偏りに気づかなければ、子供はそのままを受け継いでいくことでしょう。そして集団生活をおくるに従い、さまざまな困難にぶつかっているのが実状のようです。子供は元来、両親で育てていくのが本ですが、「母親がし

っかり基本を作ってやらなくては」と三浦さんは話していただきました。生まれたときから一番接点の多い母親が、物事の善悪や、がまんすることを教え込めれば、「反抗期」はやむをえないにしても、非行の道を歩むことはないというお話には、頭では分かっているつもりでも、日常生活でいざ実践することを考えると、難しいなと感じてしまいました。

## 心の豊かさを

物があふれ、豊かで快適な生活に慣れ過ぎた私たちが、子供に「がまん」することを教えることの難しさ。小さいころがまんさせられた経験から、子供には何でも与えてやりたいと思うあまり、ややもすると与えることを理解していることだと錯覚し、一番大事な「ふれあい」を忘れてはいないでしょうか。

「生活は豊かになってきてはいるが、子供の心の寂しさは埋められていない」と三浦さんは話します。確かに、共稼ぎの家庭は増え、忙し過ぎる親は子供

とのコミュニケーションの時間を持たず、心のすれ違いも起きてくると思います。忙しさでイライラ、ガミガミしていたのでは、夫婦間も親子間もぎくしやくしてしまいます。親がゆとりを持ってはじめて、子供への接し方も話して聞かせる形にでき上がっていくと思います。三浦さんの「精神面で安定していて、夫婦間の話し合いも良くできていれば、それだけで家庭教育は

ここ数年来、学校のPTA活動、父兄間の集い、町内会での交流と、人のつながりを広める動きが盛んなようです。こうした地域活動は、何事にも無関心で、自分の殻だけを守ろうとする人が増えている今日、とても重要なことだと話されました。小さなこと、例えば「一声あいさつ運動」にしても、全市民の参加があれば、子供たちからお年寄りまでふれあいの輪が広が

ります。照れくさくて、知っている人に会っても黙って通り過ぎてしまうことがあります。ちよつと会釈すれば、ちよつと勇気を出せばそこに笑顔が生まれるのです。子供たちも、大人から名前を呼ばれたり声をかけられることで、変なことはできないという気持がわいてくるのではないのでしょうか。飲み食いしながら歩く、菓子袋を無造作に道路に捨てる、こんな行為の一つひとつにしても、地域のみんなで声をかけあい、無くしていく努力が必要だと感じます。もちろん、鏡となる大人は「人が見ていなければ」式の、口先だけの姿勢をとらないことが一番重要なことです。

## 今、この時から

お腹の中で赤ちゃんが成長する過程は、母親にとつて喜びですが、それ以上にさまざまな不安もつめ込んでいます。「健康でさえあれば」との願いが、産み、育てていくうちに忘れられ、親は、思いどおりにならないと嘆いたり、ストレスをぶつけてきたり、エゴをむき出しにしてくるようです。今さらなどと思わず、今、この時から、自身を省みて、ゆとりある家庭教育を目指そうと思います。

## 広報市民リポーター

# 畠山 智子 (相染沢中袋)



▲三浦さんから取材する畠山リポーター (右)

◇広報市民リポーターだよりは、毎月1日号で、6人のリポーターが独自に取材した記事を掲載しています。

〈お詫びと訂正〉 8月1日号の市民リポーターだより、前次レポートの題字と文中の「一隅」は「一隅」の誤りでした。訂正し、お詫びいたします。